



牛深の朝ははやい。

五時三十分すぎ。しらじらと夜が明けてくるころ、

港町はにわかに活気を帯びてくる。六時。夜明けを告げるかのように、

セリが漁港いっばいに響きわたる。

県下最大の漁港を持つ牛深市。

ここには、その熱狂的で情熱的なリズムと踊りで知られるハイヤ節がある。

その昔、こ牛深から、海の男たちによって

全国津々浦々の港にハイヤの名を馳せた。

いわば全国ハイヤ節の元祖。今回は、活力ある水産都市づくりをめざす牛深市をズームアップ。



港おこしに、情熱の南風

活力ある水産都市づくり——牛深市

知っていますか。ソーラン節も、佐渡おけきも、阿波おどりも……みくんなルーツをたどればハイヤ節。牛深ハイヤは国民謡のふる里。

「サーサヨイヨイ、ヨイサヨイサ」南国特有のリズム、熱狂的な踊り。その昔、ここには、大漁祝いの「万超し」、不漁時は「万直し」と、何かにつけてはハイヤ節。風待ち、シケ待ちでここに立ち寄った全国の海の男たちは、にぎやかなリズムと酒に酔い、牛深乙女たちの情にほだされ、「牛深二度行きや三度裸」そして楽しかった思い出の

唄を次の港、次の港へと……。なるほど、この唄、このリズムが全国各地へと伝わったわけだ。このたびの国民文化祭では、「ハイヤの系譜をたどる」と題して、当地でイベントが開催。全国各地から民謡人たちが牛深へ集い、ハイヤの名もまた広がり高まっていく。

やっぱりいらつしやい。ました。牛深ハイヤ売り出しの仕掛人。ハイヤのことならまかせてください。

「ハイヤは私の命です。」

牛深ハイヤのことならこの人に。浦田智美先生、六十三歳。なにしろ、牛深のトレードマークとしての「ハイヤ」に「命をかけてきた」というだけあって迫力満点。それまで、その人その人、その時その時の気分だけで楽しんで来たハイヤ踊り。これを三年がかりで舞台用の振り付けとした。「古老を二人一人訪ねて研究しました。なにしろこの踊り、型なんてないんですから。」先生の執念が実って、牛深ハイヤも今では全国各地からひきあいがあがる。「基礎は基礎としてちゃんとしたら、どう現代風にアレンジしてもかまわない。なにしろかまわないが「牛深ハイヤ」をぜひ残していきたい。」そして日本中の方に知っていたいただき、古典民謡として名を連ねたいんです。「うーん。このパワーとパッションが牛深ハイヤのあのはげしさになっているのか。」米年四月のハイヤ祭りには是非牛深へ。そして浦田先生の情熱に触れてみよう。まさに全国に通用する熱風を感じることうけあい。

サーサヨイヨイヨイヨイサヨイサ

元氣印のおさかなさん。ヘルシーグルメは牛深から。日本中へとどけ「いわし宅送便」。

イワシの消費は一匹から……。それは、昭和六十一年一月のシンポジウムでの漁業後継者である一人の若者の提言で始まった。とにかく、生イワシの消費を少しでも拡大したい、水産都市牛深のイメージがアップできれば……ということ。当初五百箱でも出ればいい方かな、と全国に先がけて始められたイワシ宅送便。ところがなんと昨年は一万五千箱、そして今年には四万五千箱。

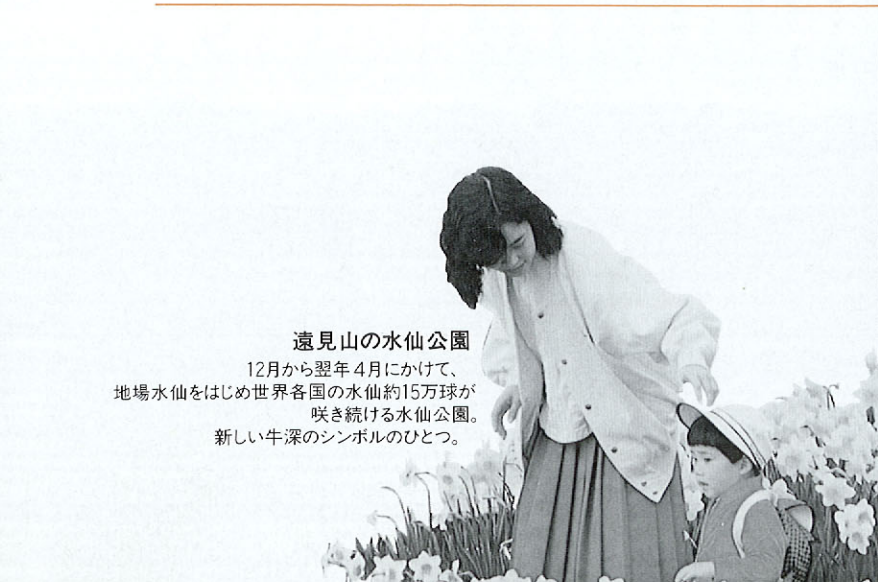
「市外の一人一人が牛深に電話をしてくれることがうれしいです。」と市の担当者。これが起爆剤になれば」と、日本一活力ある水産都市づくりをめざす意気込みも十分。牛深での年間水揚げが約五万トン。そのうち四万トンはイワシ。戦後一時期は全国二位のイワシ漁獲高を誇ったこともあるという。「東シナ海のイワシは、脂肪が多くとにかくおいしいと評判なんです。」漁協でも市と協力して今後ともどんどん拡大していく方針。イワシは年間獲れるが、脂がのついていばんおいしいのは冬。宅送便は来年も一月から三月にかけて実施される予定のこと（一箱千円）。来年一月には牛深に注目。県外の友人にも送ってやろう。



後浜新港建設予定地
日本一活力ある水産都市づくりをめざして、後浜地区に13.7ヘクタールを埋め立て大型の新漁港を建設中。この新漁港を核に一大水産物流通加工基地の実現をめざそうと熱い期待が高まっている。



明日の牛深を担う若人 三十人
「うしぶか二十一世紀 若者懇話会」始動。
牛深に活気をとれどそう。それには若い人たちの智慧と情熱を……。ということ。今年の五月に発足。市内に住むいろんな分野でがんばっている若者三十人。まず市の現況を知り、さらには牛深を外からながめてみよう、今勉強中。これから二年間かけて、さまざまな角度から、提言していく。「先進地へも勉強に行きました。その町だからできた、ということもありますが、やはり人づくり、人の和が産業づくりの前にあるんですね。これからはいろんな人の話をひきだしていきたい。」と、会長の杉本幸徳さん。今後の熱い議論が注目される。



遠見山の水仙公園
12月から翌年4月にかけて、地場水仙をはじめ世界各国の水仙約15万球が咲き続ける水仙公園。新しい牛深のシンボルのひとつ。